

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡 (17)

－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第25号には横浜市域の12268-1（継続掲載）を掲載している。本資料は横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷古墳の調査時のノートで数年に渡って掲載してきた。同古墳については他にも莫大な資料があるが、本編では新紹介資料とともに、一旦ここまで掲載してきたもののまとめを行うことしたい。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～19に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は横浜市12268-1：植山英史が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は〔調査(踏査)年月〕〔資料保管場所〕〔記載内容概略〕とし、2. は〔(遺跡及び)遺物(遺構)概要〕〔掲載図書〕〔掲載図書概略〕〔小結〕などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡位置図

年報番号横浜市 01268-1 瀬戸ヶ谷古墳（10） 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月] 1943・1950年

[資料保管場所] 東京国立博物館

[瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート10]

1. 赤星ノートの内容

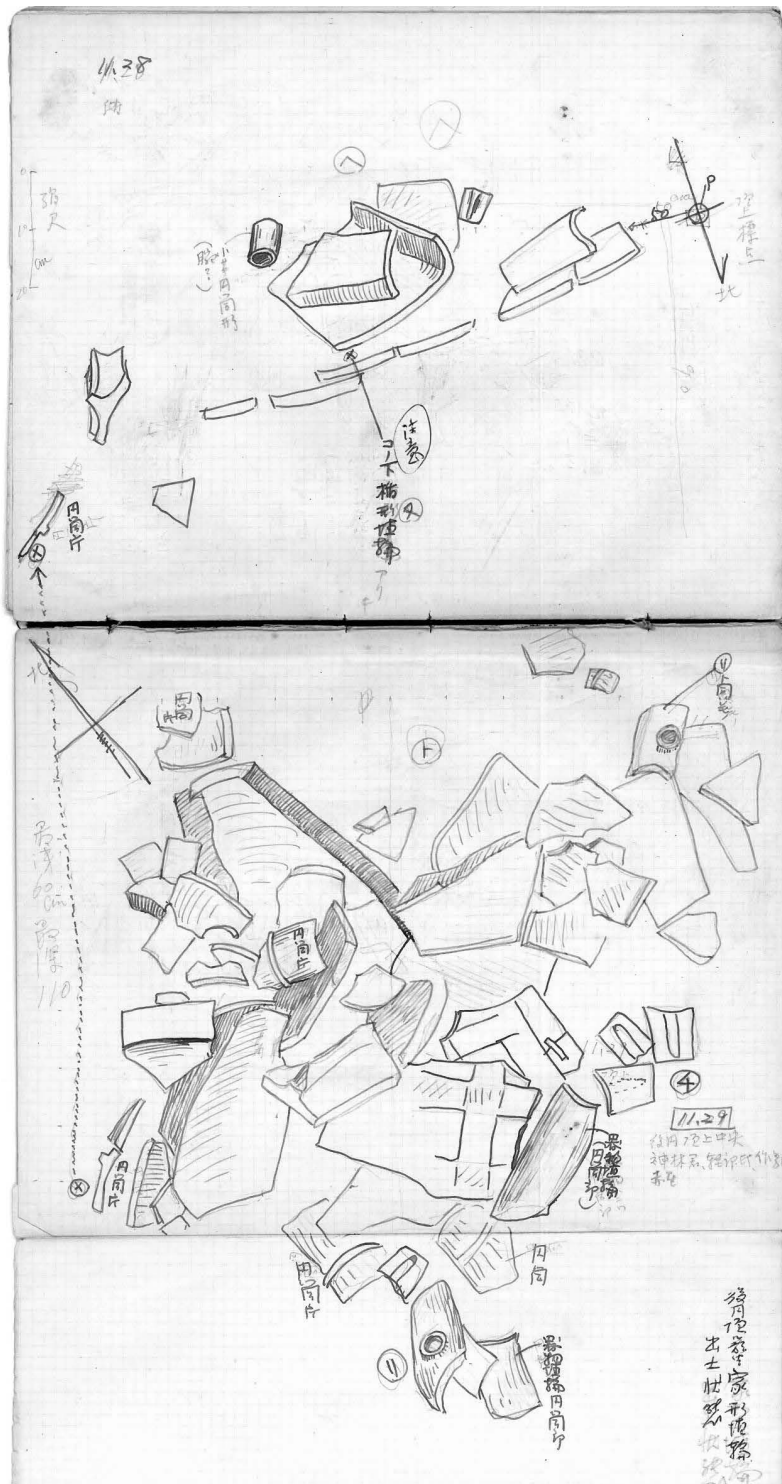
前回から引き続き今回は01268-1・(3)の方眼ノートの記載内容について取り上げる。方眼ノートの一部には日付が記載されている。調査時の出土状況図では18年8月1日、8月1日、8.11、11.14、11.28と記載されているものを順に紹介してきた。これらは昭和18年時調査の一連の記録と考えられる。今回の紹介する頁(第2図)にも11.28と記載されており、昭和18年11月28日のものであろう。なお、日付と調査の関係については本稿で今一度整理を試みたい。

第2図には「後円部●●家形埴輪出土状況」の記述があり、後円部から出土した家形埴輪の出土状況の記録であることが判る。前回紹介した資料と同様、下頁は一部半紙を繋ぎ合わせて折り込みになっている。上頁の左端に鉛筆書きで縦方向のスケールが描かれ、右横に「縮尺 cm」と記入されている。スケールは約3.0cmの長さで、右に「0-10-20」と記入しており、20cmを3cm(15%)として描いたものである。また、上頁の図はL字状に曲がる断面の埴輪片や小円筒状の部位等が前回紹介した家形埴輪の出土状況「瀬戸ヶ谷古墳(9)第3図下頁」『研究紀要24』と一致しており同一個所の出土状況を描いたものと考えられる。

図の状況から家形埴輪は破損した状態で出土したと思われる。図中には「円筒片」「器物埴輪(円筒部)」などの記述もあり、家形埴輪とともに器財埴輪も破片の状態で重なるように出土していたと考えられる。「円筒片」については赤星氏が「器物埴輪(円筒部)」「器物埴輪円筒部」と記述を使い分けているため、器財埴輪の円筒部ではなく円筒埴輪片か、若しくはその判断がつかない破片であろう。「器物埴輪(円筒部)」と書かれた右上には④の数字が振られている。その上には先端に丸みを持つ棒状の表現があり、「器物埴輪(円筒部)」と同一個体だとすると靱形埴輪の鏃を表現したものの破片の可能性が考えられよう。

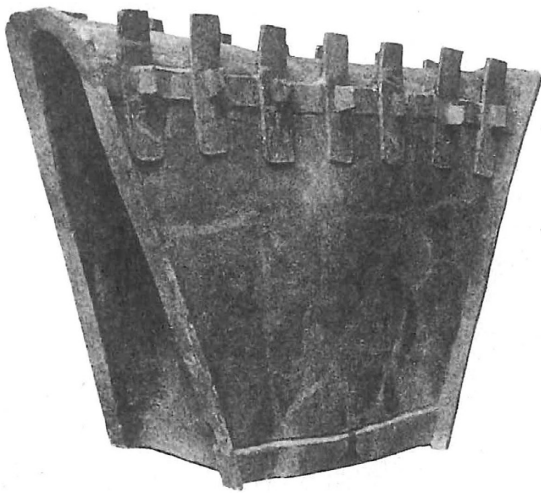
家形埴輪については、特に「器物埴輪」「円筒片」などの記載がない破片が家形埴輪の破片と推定されるが、明確に部位が判るものは少ない。「器物埴輪(円筒部)」の左横に描かれた比較的大きな破片には格子状、十字状の表現が認められる。瀬戸ヶ谷古墳(1)(研究紀要12)で瀬戸ヶ谷古墳から出土した家形埴輪の屋根部の写真を紹介したが、ここに再掲して比較を行いたい(第3図)。写真の屋根部の上方に屋根飾りと横板を表現した貼り付けによる表現があり、横板との交点が十字状になる。十字の交点には突状の表現があるが、本図では明確な突状の表現は見られない。また、本図の向きでは縦方向の帯幅に線が描かれている。写真と同様の飾り表現だとすると、この縦方向が横板となり帯幅の線から横板が上になる表現だが、写真の屋根は横板の上に縦方向の飾りが表現されており、図との関係は逆となる。従って、本図は写真に見られる屋根部の表現とは別のものである可能性も考えられる。

上頁中央には「L」字状の断面を呈する破片が重なった状態で描かれており、「コノ下盾形埴輪」と記入されている。左上には小さい円筒形の破片が描かれ、「小・・・円筒形(腕?)」と書き込まれている。右上にも同規模の破片が描かれ、先に靱形埴輪の鏃を表現の可能性がある指摘したものと類似した棒状の表現が認められる。家形埴輪の部位で円筒状を呈するものは、屋根に乘せる鰹木の表現が思い浮かぶが鰹木は中実



第2図 家形埴輪出土状態図

であることが多い。また、先に紹介した瀬戸ヶ谷古墳で出土した家形埴輪の屋根部（第3図）は、横板と組み合わせた屋根飾りを持つもので、このような表現をする屋根には円形の鰹木は乗らないのが一般的である。少なくとも第3図の屋根部とは別の個体であると考えられるが、第3図の屋根部との関係は現段階では不明である。また前回紹介したように第2図の上頁と同一個所を描いた図には「…表土より-110cm箱形●●あり」

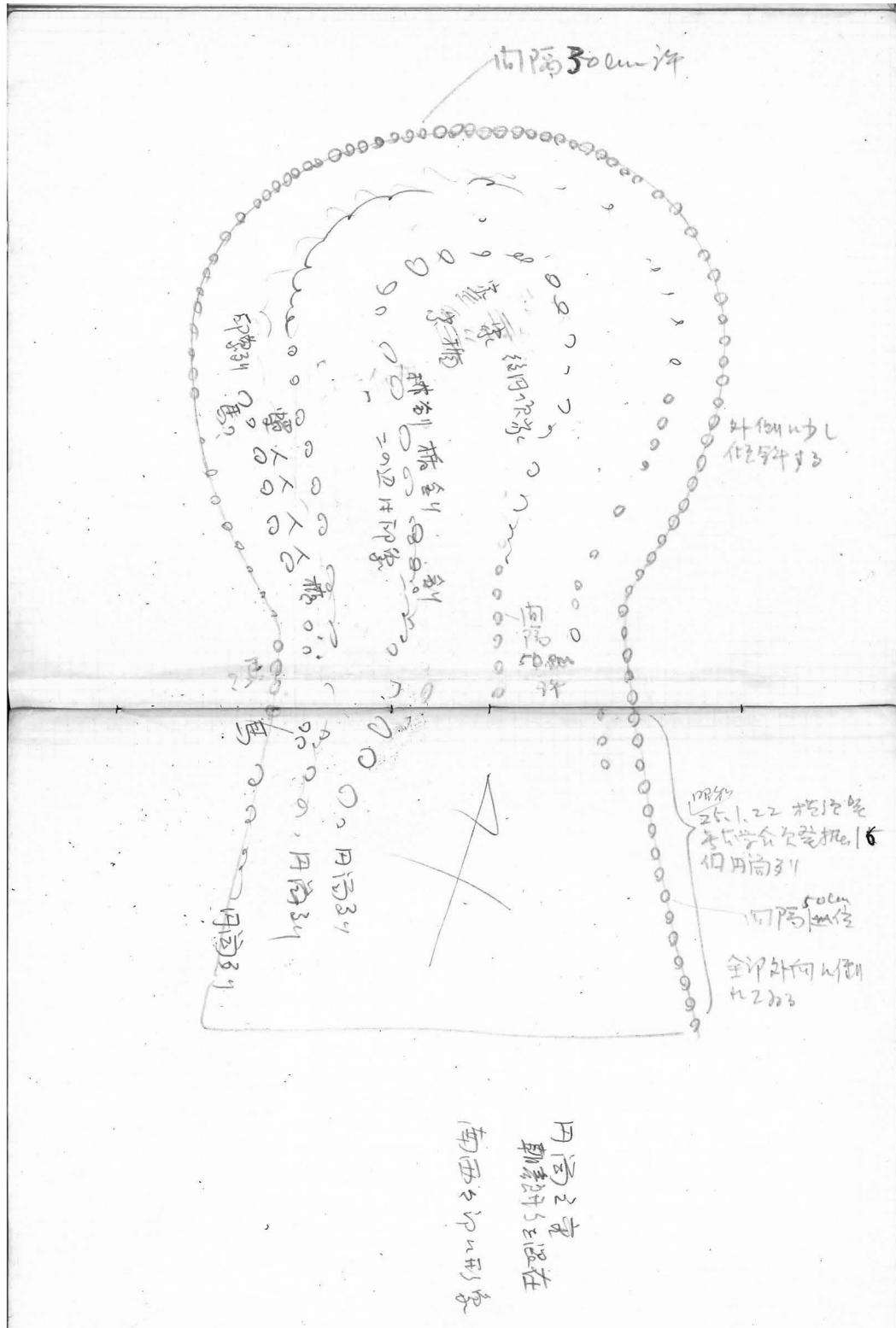


第3図 瀬戸ヶ谷古墳出土家形埴輪（再掲）

の記述があることから、家形埴輪の基底部が残存していたと推定される。本図上頁は前回の図から周囲の埴輪片を取上げた後の状況を記録したものと考えられるが、箱形の表現は認められないことから、下から出土した状況について後に追記したものであろう。

第4図は瀬戸ヶ谷古墳全体の埴輪の出土位置図である。まずこの図の作成年代についてであるが、目を引くのが下頁右側に書かれた記述である。右側には「昭和25.1.22 横須賀考古学会●発掘16個(?)円筒埴輪列」と記入されている。本方眼ノートについては、掲載を開始する際表紙に「昭和18年」の記載があること、鉛筆・マジック・青字（インク）が認められること、鉛筆の記載をマジック・青字でなぞっている点を鑑み、記録作成当初は鉛筆書きだったものを、後の資料整理の際にマジック・青字でなぞったものと推定した（「瀬戸ヶ谷古墳（5）」『研究紀要15』）。また、冒頭で触れたように一連の出土状況図には日付が書かれており、「瀬戸ヶ谷古墳（7）」『研究紀要18』で紹介した図にはインクで「18年8月1日」の記述が認められる。以降紹介した資料には年の記述は無く月日のみが書かれているが、「瀬戸ヶ谷古墳（8）」『研究紀要23』では、8/1の記載がある出土概略図と8/11の記載がある出土状況実測図は同一個所の図であり、「瀬戸ヶ谷古墳（1）」『研究紀要12』に掲載した写真も含めて一連の調査過程を記録したものとして判断した。そして記載方法が同じ本稿第1図の11.28も冒頭で述べたように同一年のものと推定した。本図は古墳の形状と三重に巡る埴輪の出土位置が描かれているが西側を中心に別のインクで「人」「馬」「円筒列」「この辺に形象」などの記載とその位置を示す「○」が一部追加されている。今まで紹介してきた出土状況図は基本的に鉛筆の記載をマジック・インクでなぞったものに一部追記を行っているが、本図は後円部の北西側の一部のみに二段目の波状のラインがあり、それよりやや墳頂部側にインクでラインを追記している点以外は元図をなぞった跡は認められず、今まで紹介してきた出土状況図とは異なる形で描かれている。以上のことから、まず本図の最終的な追記を実施した時期は昭和25年1月22日以降と考えられる。また、当初の作成時期については本図からは推定することが困難であるが、出土状況図と筆記具の記載手順が異なるため、昭和18年時の一連の出土状況図とは異なる時期の可能性も考慮すべきと思われる。

次にその内容を見ていくが、最下段の列は後方部端を除いて埴輪列を表す「○」が連続して並んでいる。西側の後円部の途中から前方部にかけては、間隔がやや広く描かれている。先に紹介した「昭和25.1.22…」の下には「間隔50cm位」「全部外向きに倒れている」と記載されている。また後円部東側には「外側に少し傾斜する」との記述が見え、後円部端には「間隔30cm●●」と書かれている。前方部側には「円筒●●朝顔形と混在」「南西●●●形象」の記載がされている。2列目（2段目）の埴輪列は東側はくびれ部より僅かに前方部側から始まり後円部を巡り西側の前方部途中まで描かれているが、後円部の一部は先に述べたように波状のラインの下書きとインクの追記となっており「○」表現ではない。そのライン表現から再び「○」表現に変わった後の後円部西側一帯には下段と2段目の間に「○」表現列が追記され、「形象列」「馬?」「帽子」「人」「人」「人」「人」「楯」と記され、くびれ部に近い前方部側に「馬」と書かれている。この一連の記載によ



第4図 瀬戸ヶ谷古墳出土土家形埴輪

り後円部西側の下段と2段目の間に形象埴輪を配置していたことが判る。本図は埴輪の出土位置の概略図であるため、この部分が墳丘斜面にあたるのか、何らかの施設が設けられていたかは本図だけでは判断し得な

い。形象埴輪は一行に並んでいることから、大規模な平坦面等の埴輪配置施設では無かったと思われるが詳細は不明である。2列目の前方部側の埴輪列端には「円筒列」と記入されている。

埴輪頂部の埴輪列は東側のくびれ部から後円部を巡り西側の前方部の途中まで続いている。東側くびれ部には「間隔50cm位」の記述がある。後円部には「後円部頂家」「家」「家」「家」「楯」と書かれている。

後円部西側からくびれ部には「楯」「剣」「楯」「剣」「剣」「この辺は形象」との記載があり、後方部の埴輪列端には2段目と同様「円筒列」と書かれている。

2. 記載内容の整理

以上のように本図は概略図ではあるが、瀬戸ヶ谷古墳の埴輪列がどのようなものであったかを示す貴重な資料であり、配列について判ることを整理したい。まず、下段の埴輪列は東側後方部の端から確認され、西側後方部の途中まで巡り、円筒埴輪と朝顔形埴輪で構成されている。後方部東側の円筒列は外側に倒れた状態で発見されその間隔は50cm位である。後円部東側は倒れずに外側に傾斜した状態で、後円部端の列の間隔は30cmと後方部よりも密になる。西側の列については間隔の記載はないものの東側や後円部端より円筒列を示す「○」の間隔を空けて描いており、東側より間隔が広い可能性がある。2列目の配列は前方部のくびれ部に近い位置から確認され、西側の前方部途中まで巡っている。後方部北西側は「○」表現ではなく、波状のライン表現となっている。これが何を意味するものなのか、本図からは断定出来ないが、今まで紹介してきた赤星氏の記録の精密さから、単に略して描いたということではなく、同位置の配列について赤星氏が調査時に正確な情報が得られなかったため、あえてライン表現にした可能性も考えられよう。後円部西側からくびれ部にかけては下段と2段目の間に馬・帽子・人物4体・楯の埴輪列が並び、やや離れた前方部側に馬が配置されている。後円部埴輪からは家形埴輪が複数確認され、後円部西側からは楯と剣を交互にした形象埴輪列が並んでいたことが判る。

瀬戸ヶ谷古墳の埴輪列について赤星氏は後に『神奈川県史 資料編20 考古資料』で瀬戸ヶ谷古墳の測量図に出土位置をドットで示したものを公表しているが、その図で示したドットは本図に較べて少なく、趣が異なる。今後はこの違いや、神奈川県史に書かれた家形埴輪の記載等について検討を試みたい。

[掲載図書]

『神奈川県史』資料編20 考古資料 1979

引用・参考文献

植山英史「考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡 瀬戸ヶ谷古墳1～9」『研究紀要 神奈川の考古学』12～18・23・24

東京国立博物館 1986『東京国立博物館図録 考古遺物編』（関東Ⅲ）

横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 「16. 鶴見川流域の埴輪」『古代のよこはま』